

通貨分散とリスクヘッジ

中長期の資金運用者にとって、FED の国債購入の減額(テーパリング)の影響と対策を考えることは最重要の課題の一つである。外貨準備の運用担当者にとっても同様だ。だが彼らの声はあまり外に出ない。

IMF が収集する外貨準備の通貨別内訳でも、先進国はほとんど通貨別のデータを提供するが、新興国では通貨別のデータを明らかにしないところが多い。世界の外貨準備を持つ中国が代表的だ。

そうした中で南アフリカの中銀が、外貨準備の通貨分散を促進することを明らかにした。オージー、キューイ、韓国ウォンそれに人民元などだ。テーパリングに備えて米国債からのシフトだ。それでも米国債が最大の資産であることに変わらないが、債券先物なども使ってリスクヘッジをする。

南アの外貨準備は 500 億ドル足らずで大きくないが、こうした傾向は他の新興国でも共有される可能性がある。

テーパリングの影響の第一弾は、5 月にバーナンキがその可能性を示唆したあとに表れた。新興国通貨の下落や米国債のイールドの上昇などだ。

IMF の外貨準備のデータによれば第二四半期にその他通貨(ドル、ユーロ、円、ポンド、スイスフラン、オージー、カナダドル以外)の外貨準備が 15%も減少した。異例なことだ。しかもそれは先進国が保有する資産で、新興国の保有するその他通貨の額に変化はなかった。つまり先進国の外貨準備の運用担当者はいち早くテーパリングに対応したが、新興国の担当者は動かなかった。そして今、南アのようにようやく動くとしているのだ。

南アは中国国債に外貨準備の 3%を振り向ける予定だ。5 月下旬から今日までの人民元の堅調振りを見ればそれもうなずける。

その点では 5 月以降の通貨の変動率が世界の外貨準備の運用担当者にとっての通貨選択の決め手になる可能性は高い。